

# World Englishes 時代を生き抜く： 日本の英語学習者が目指す英語コミュニケーション能力

小 野 尚 美

## [要旨]

本稿の目的は、英語が「世界の英語」と言われる時代に、日本語を主要語としている私たちが英語でどのように世界の人々とコミュニケーションしていくべきかについて、社会、文化、言語の関係から考察する。World Englishes 時代の日本の英語学習は、世界共通語としての英語の運用能力育成という発想だけではなく、英語の多様性に対する理解を深め、複文化的視点に基づいた国際理解能力が備わった人材育成を目指すべきではないだろうかと結論づけている。

## はじめに

いつから English が複数形になったのだろうか。今から 40 年ほど前、筆者が英語を初めて学んだ中学 1 年生の時から、English は常に大文字で始まる単語で、“es” がつかない単語であった。今でもコンピューターで Englishes と書くと下に赤い波線が出るが、これも間もなく出なくなるのではないだろうかと思うほど今や World Englishes の時代になってきている。イギリス英語であろうとアメリカ英語であろうと英語は全て変種 (variety) であるという考え方は、いたるところで市民権を得ているようである。例えば、海外で開催される英語教育関係の学会でも英語を流暢に話すシンガポール人で、英語で小学校からずっと教育を受けてきたという人に会ったことがある。親戚にはマレー語を話す人や北京語を話す人もいるが、彼女の家族はみんな英語で生活をしていて、彼女にとっては英語が第一言語であり母語なのだという。彼女の英語にはシンガポール人の特徴ともいえるイントネーションがあるが、堂々と自分たちの英語で議論を交わしている姿を見ると、World Englishes 時代がやってきたことを認めざるを得ない。

## 1. 英語話者と World Englishes

ここに英語に関するあるデータがある。英語を実用レベルで使っている話者の数は地球全体で約 15 億人といわれている (図 1 を参照)。<sup>1</sup> 世界の総人口は推定約 73 億人であるとする、英語コミュ

コミュニケーション能力があれば、データ上では世界人口の約 5 分の 1 の人々と意思疎通が可能だと考えられる。この約 15 億人のうち英語を母語とする話者である native speaker of English は 25% の約 3.8 億人である。残りの 75% にあたる約 11.2 億人は、英語を第二言語または外国語として使用している nonnative speaker of English である。

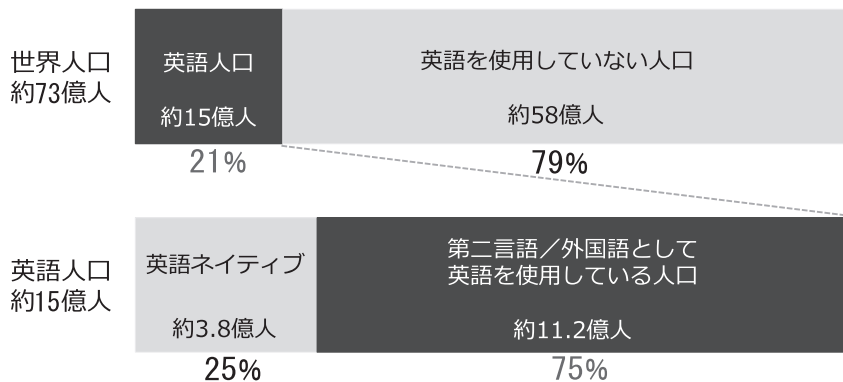


図1. 世界人口の中の英語話者の数

出典：小柳恒一（2019）「世界の英語人口 15 億 | 日本も急増中！英語を習得すべき 8 つの理由」  
（The English Club）

また、native speaker of English の約 3.8 億人のうち、アメリカ（アメリカの総人口約 3.2 億人のうち英語を使用しない人はこのデータから除く。また、イギリス、カナダ、オーストラリア、その他の国の場合も同じである。）が 2 億 5,200 万人（66%）、イギリスが 6,000 万人（16%）、カナダが 2,600 万人（7%）、オーストラリアが 1,800 万人（5%）、その他が 2,400 万人（6%）となっている（小柳, 2019）。また、nonnative speaker of English の中で最も多くの話者（おおよその数だが）がいる国は、インドの 11%（1 億 2,600 万人）で、2 番目がフィリピンの 8.0%（9,000 万人）、ナイジェリアの 7.1%（8,000 万人）、ドイツの 4.2%（4,700 万人）、フランスの 2.1%（2,300 万人）、イタリアの 1.5%（1,700 万人）で、その他が 66%（7 億 3,700 万人）となっている（図 2 を参照）。インドはイギリスの旧植民地であり、フィリピンは旧アメリカ植民地である。またナイジェリアもイギリスの旧植民地であった。4 位以下のヨーロッパの国々の場合は、ドイツ、フランス、イタリアの総人口における英語人口の割合はインドよりも高く、それぞれ約 60%、約 40%、約 30% となり、ヨーロッパのこれらの国々で仕事をする場合英語を習得していると便利であることが分かる（前掲、2019）。さらにこのデータから、英語は native speaker と呼ばれている人々よりも多くの nonnative speaker といわれている人々によって使われている言語であることも明らかである。言語学者でありクレオール学の祖といわれているフーゴ・シューハルト（1842-1927）はかつて、「すべてのことばはまじりあうことによって変化し、発展してきたのだ」と述べている（田中、1999、p. 6）。この言葉を借りるならば、これだけ多くの英語が母語話者でない人々によって使われている英語は、それぞれの話者の言語や文化によって影響を受けながら、混じり合い変化して発展しているのだらうと推測することができる。このことから、もはや English は単数であり得ないのである。

## 英語を第二言語/外国語として使用している人口 11億2千万人

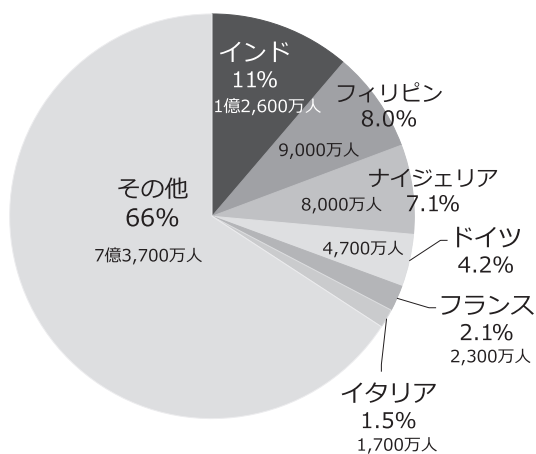


図2.

出典：小柳恒一（2019）「世界の英語人口 15 億 | 日本も急増中！英語を習得すべき 8 つの理由」  
(The English Club)

日本の英語学習者の中には、英語といえば「アメリカ英語」と「イギリス英語」が標準英語で、英語学習をするときのモデルとなる英語と漠然と理解している人が多いように思う。また、アメリカは、イギリス人の植民地であることから始まった国であるという歴史から考えても、「アメリカ英語」と「イギリス英語」はよく似ていると考えているかもしれない。しかし、「アメリカ英語」も「イギリス英語」もこれまで様々な言語との接触により変化してきたという経緯があり、それぞれ特徴を持つ英語の変種なのである。

ここに、同じ英語であるからアメリカ人とイギリス人は問題なくコミュニケーションができるという単純な話ではないことを示すエピソードがある。これは2019年2月14日の「奇跡体験アンピリーバボー」という番組で放映されていた実話である。<sup>2</sup> 同じ英語の native speaker であって日常の意思疎通は問題がなかったにもかかわらず、肝心なところで理解し合うことができず、人生の歯車が狂ってしまったという悲しい初恋物語である。

今から約70年前の第二次大戦末期、アメリカ陸軍の精鋭部隊に所属していたノーウッドは、同じ連合軍であったイギリスに駐留していたときに、ジョイスという女性と恋に落ちる。この二人にとってこれは初恋であった。1944年ノーウッドの部隊は出勤命令が下され、しばらくジョイスと会うことができなかった。それ以降二人はアメリカとイギリスとの大西洋を挟んだ手紙のやり取りをしていった。ある日、ノーウッドは手紙でジョイスにある重要な申し出をした。それは次の“Would you come to the states and make my house a home?” 「アメリカに来て、僕の家を君にとって居心地のいい住処にしてほしい」という心を込めたプロポーズの言葉であった。しかしジョイスはこのプロポーズをあっさりとは断ってしまった。それまでの二人の愛情に満ちた手紙のやり取りから、ノー

ウッドはきっとこのプロポーズを受けてくれると信じていたので、なかなかこの現実を受け入れることはできなかった。その後二人はそれぞれ別の人と家庭を持ち子どもに恵まれた。ノーウッドは後に結婚した女性と死別し、ノーウッドと別れてから看護婦として働いたジョイスは子供をもうけたが離婚した。何十年もたったある日ジョイスがノーウッドの消息をインターネットで検索したところノーウッドの情報を見つけることができた。結局 93 歳と 88 歳という高齢になったこの二人はお互いの息子たちの助けにより 70 年の歳月を経て再会し、短い時間ではあるが 70 年の失われた歳月を取り戻すことができたという話である。この初恋ミステリーで注目したいのは、二人はお互い愛情があることが分かっていたにもかかわらず、どうしてジョイスはノーウッドからのプロポーズを断ってしまったのかである。当初、ノーウッドも結婚の申し込みを断られた理由は全く分からなかった。

そのミステリーの鍵は、ノーウッドのプロポーズの言葉 “make my home a house” にあった。ジョイスは、「make + 目的語 + 名詞」の構文で “make” を「整える」と解釈した。つまり、“make my house a home” を「家を整える、家事をする」「家政婦としてアメリカに来てほしい」と理解した。ジョイスは、彼からのメッセージに憤慨し、この申し出をプロポーズと理解することもなく、別かれることにしたのであった。ノーウッドは、1916 年にアメリカの詩人エドガー・アルバート・ゲストが詩の中で初めて使った「家を居心地のいい場所にする」という叙情的な表現が流行していたのを受けて、ジョイスへのプロポーズの言葉にこの表現を選んだのであった。当時のアメリカでは、この表現がとてもロマンティックだということで多くの人々に知られていたが、イギリスではまだこの “make my house a home” というロマンティックな表現が知られていなかったため、ジョイスはノーウッドの真意を理解することができなかった。また手紙によるやり取りであって直接話し合ったわけではなかったので、誤解を解く機会もなかったのだが、このエピソードは、イギリス英語とアメリカ英語は同じではないのだということを説明することのできるエピソードであろう。アメリカはイギリス人入植者を始めとした移民によって開拓された地であり、18 世紀ごろのアメリカで話されている英語はイギリス英語と似ていたと言われていたが、その後様々な文化背景を持つ人々が入植するとともにアメリカ英語とイギリス英語の違いが明らかになってきた。英語の綴り、発音の仕方、語や表現の意味が異なるだけでなく、同じ単語でもその概念が異なるという現象も起こる。この考え方は、文化言語学で説明されている。文化言語学では、言語と文化の概念化の関係を探求し、その始まりは 18 世紀から 19 世紀にかけて行われた Franz Boas や Edward Sapir といった研究者らの研究に遡る。この学問によると、人間の言語と言語の変種の特徴は、文化スキーマ、文化カテゴリー、文化概念メタファーといった文化の概念化の中で形成される (Sharifian, 2015)。例えばオーストラリアでアボリジニの英語話者の “family” の概念について調査したところ、オーストラリア英語の “family” とは意味が異なっていることが分かった (Sharifian, 2005)。アボリジニ英語話者にとって “family” は核家族ではなく、核家族の枠を超えた叔父や叔母を含む親戚を意味していた (前掲, 2005)。アメリカ英語とイギリス英語はもはやそれぞれ特徴のある英語の変種

であり、異なる地域に住み異なる文化を持つ人々によって使われ、文化の概念化の過程を経て次第に異なる種類の英語になってきたということである。

## 2. World English or World Englishes?

世界に存在する英語は、その発音、表現や語彙、文法において様々である。発音でもそれぞれの英語で違いがある。よく知られている表現に、“I will go to the hospital today.”がある（下線部は筆者による）。これをオーストラリア英語で発音すると、“today”が“to die”と聞こえ、おかしな意味になってしまう。オーストラリア英語では、Aを /ai/ と発音するからである。筆者が以前オーストラリアで船に乗って島に渡ろうとしたとき、海岸で船が着く場所を尋ねたところ、“You should go to Aisle A (/ai/).”と言われ、/ai/ とその音のまま理解して Aisle I へ行ってみたが船はなかった。よくよく聞いてみると Aisle A であったことがようやく分かったという経験をした。オーストラリア英語では、Aを「アイ」と発音し、Iは「オイ」という音のように聞こえ、Eは「エイ」のように聞こえる。ロンドンの下町っ子が話すコックニー英語を話す人々が移住してきたからだという理由で、オーストラリア英語はコックニー英語と似ているといわれている。アメリカ英語に慣れてきた筆者にとっては、AとIとEの違いを理解するのはなかなか難しく、聞きづらい英語だと感じたことを覚えている。「マイフェアレディー」の映画の中でオードリー・ヘップバーンが演じる主役がコックニー英語を話す人で、“The rain in Spain stays mainly in the rain.”は、“The rine in Spine sties minely in the pline.”（田中、2005、p. 48）と発音されている（下線部は筆者による）。コックニー英語では、/ei/ と /ai/ の区別がつかない、「二重母音」がうまく発音できないという理由から、makeは「マイク」、takeは「タイク」、rainを「ライン」と発音してしまう。またhの音を落とし、haveは /ave/ となり、here/ere/ となる。

英語の変種によって、表現も大いに異なる。「私は、マンションに住んでいます」と英語で表現する場合、アメリカ英語で言うと、“I live in an apartment.”となり、イギリス英語では“I live in a flat.”となる。どうしても「私は、マンションに住んでいます」と自分が所有しているマンションであることを伝えたい場合は、“I live in a condominium (condo).”または“I live in the apartment that I own.”となる。イギリスでアパートを借りるときに、“Give me a room on the first floor. 「一階の部屋にしてください」と言ったら、地下の部屋を与えられる。イギリスでは、「一階」は「地下」のことを意味し、アメリカや日本では「一階」はそのまま「一階」を意味するからである。

一方シンガポールでは、公用語の一つである英語は、標準シンガポール英語 (Standard Singapore English) と口語体シンガポール英語 (Colloquial Singapore English) に分けられ、後者がシングリッシュ (Singlish) と呼ばれる日常生活で使われるシンガポール英語である。シンガポールは、中国語、英語、マレー語、タミール語が公用語であるが、国語はマレー語である。英語は社会の共通語 (first language) とみなされ、1987年から学校教育の言語とされている（東京外国語

大学モジュール、October 5, 2019)。四つの公用語がある多民族国家であるシンガポール英語には、多民族国家に適したイギリス英語、中国語、マレー語、タミール語の要素を取り入れた独特のイントネーションと言い回しがあるが、特に中国語とマレー語の要素が多く含まれている（前掲、October 5, 2019）。シングリッシュの特徴の一つに、can を頻繁に使う習慣がある。<sup>3</sup> 「いいですよ」を意味する“Can!”、「本当ですか」を意味する“Can?” があり、「もちろん、OK です」を表す“Can!Can!”がある。また特に大きな意味の違いはないが習慣として、“Never mind lah.” といった語尾に“lah”を付ける。中国語とマレー語には過去を表現する動詞変化がないことから、この二つの公用語の影響を受けている可能性がある（田嶋、2017）。例えば、「昨日、教会に行きました」と言いたいときには、“I go to church yesterday.” となる。動詞の時制は気にせず、副詞の“today” “yesterday” “already” を付けてその意味を伝えるという特徴もある。シンガポール政府は、シングリッシュを排除する言語政策を取っているが、このシングリッシュは、まさしくシンガポール人の公用語と英語が日常生活の中で混ざり合い発展してきた英語の変種である。シンガポール人の中で自然に発生して出来上がった、日常生活に根差した合理的な言語であるため、なかなか排除するのは難しい。このようにその土地の言語（local language）と文化が英語と混ざり合って発展してきた公用語としての英語と母語として使う話者の英語をどのような枠組みで考えていくかが問題になる。どれも英語か、どれかが正統な英語か、どの英語話者が native speaker と nonnative speaker かなど、言葉と文化の関係から考察してみる。

### 3. アメリカ英語、イギリス英語、世界の英語たち

World Englishes を話題にするときに必ず議論の出発点となるのが、1992年に出版された Kachru の *The other tongue: English across cultures* の中で提示されている「世界の英語の三つの同心円(3 circles model of World Englishes)」である。次の図3は、Kachru の三つの同心円である。この同心円の中心に「内円 (Inner Circle)」があり、そこにはイギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、南アフリカ英語など、英語を第一言語として使っている国々の英語が入っている。これらの英語を使っている人々にとって、英語は ENL (English as a native language) または L1 (First Language) であると考えられている。“A native language” を直訳すると「母語」となるが、母語が必ずしも第一言語とは限らないので注意すべきである。アメリカへ移民した人達の場合、子どもは親の使っている言葉を聞いて育ち、その言語が母語となるが、学校に行くようになると学校で使われている英語の方が母語よりも流暢に使えるようになる現象がしばしば起きる。そのような移民の子どもの場合に英語は第一言語となり、本来の母語よりも流暢に使えることができ、アメリカ社会で生活する上で重要な主要語となっている。また、ニュージーランドは、英語の他に先住民族の言葉（マオリ語）を公用語としており、カナダは、英語とフランス語の二か国語を公用語としている。



その次にあるのは「外円 (Outer Circle)」である。ここには英語を第二言語 (L2) または公用語 (English as a second language) として使っている国々の英語が入る。シンガポール英語、インド英語、ナイジェリア英語、マレーシア英語などがそれである。公用語としての英語が使われている国は、多民族国家である場合が多い。多くの民族がそれぞれの言葉を使うという事情があるので、国の公的文書を著すための共通語が必要となる。植民地であったところでは、旧宗主国の言葉を公用語とする場合もある。また、多くの民族がいて、使われている言葉の種類も多いため、インドのように十種類以上の準公用語がある国もある。

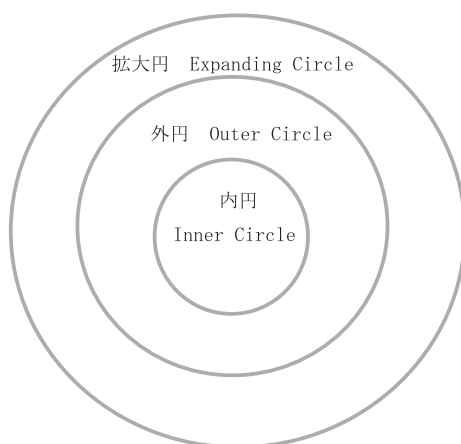


図 3. 3 Circles Model of World Englishes<sup>4</sup>

最も外側にあるのが「拡大円 (Expanding Circle)」であり、ここに日本で話されている英語、中国で話されている英語、スウェーデン英語など英語を外国語として使っている (EFL/English as a foreign language) 国々の英語が入る。19 世紀には、多くの植民地を持っていたイギリスで使われているイギリス英語が標準英語とみなされ、20 世紀になると軍勢力、経済力を発揮してきたアメリカで話されているアメリカ英語が標準英語とみなされてきた。しかし図 1 で示されているように、英語話者人口約 15 億人のうち 75% が英語を公用語または外国語として使っている話者であることから、外円と拡大円に属する英語話者の数はかなり多く、これらの英語は世界の英語の中でかなりの存在感を増してきていると考えられる。

さらに英語の仲間として、ピジン英語 (Pidgin English)、クレオール英語 (Creole English) の存在についても考えてみる必要がある。ピジンは、少なくとも二つの言語が接触したことによって生まれる言語を意味する。多くのピジンはヨーロッパ列強国やアメリカが貿易目的で南アフリカ、パプアニューギニア、カリブ海などの地域の国々と交流し、その土地の人々と接触したとき意思疎通する必要があったためにコミュニケーションを通して双方の言葉が混じって生まれた言語である。ピジン英語は、英語が親言語となって発達してきた言語であるが、ピジンフランス語など英語以外の親となる言語 (ヨーロッパの国々の言葉が language parents となる) と一緒になって様々なピジ

ン言語が生まれている。通常は、接触する二つの言語の片方が語彙を提供し、もう一つの言語が文構造を提供するというようにしてピジン言語が生まれてくるといわれている (Kirkpatrick, 2007)。

ピジン英語が次世代へと受け継がれていくと、それはクレオール英語となる。クレオール英語の例としてよく知られている言語に Tok Pisin 語 (トクピシン語) がある。Tok Pisin 語は、英語を土台として生まれたクレオール語の一つであり、パプアニューギニアの公用語の一つとなっている。パプアニューギニアは、イギリスやオーストラリアの支配を経て戦後独立した国で、部族ごとに言葉が異なり、800 以上の言語が存在しているといわれる多民族国家であるため、国家で共通語を設定する必要があった(山下, 2018)。そのような状況で選ばれた公用語の一つがトクピシン語である。支配者であるイギリス人やオーストラリア人とのコミュニケーションが目的で発達したこのトクピシン語は、主語と動詞の位置を代えて疑問詞を文頭に出さない、過去形と現在形の区別をしないなど、いわゆる極端に簡略化され変形した英語であるが、これがパプアニューギニアの公用語となった(前掲, 2018)。

Kachru の三つの円にはピジン英語やクレオール英語は入っていない。しかし、世界の英語たちの発達の特徴は、他の言語との接触により影響を受け、その地域の言語 (local language) から語彙を借入して混ざりながら発達してきたこと、また、先に述べたシングリッシュ英語の場合と同様、その話者の間で自分たちの気持ちを最も表現でき、自然発生的に生まれた言語であり、合理的な話し方であることから、ピジン英語やクレオール英語も同じ過程を経て生まれてきた英語の変種なのだといえないだろうか。ピジン英語は、ほかの英語の変種との違いの一つとして、理解しやすさ (intelligibility) という点で英語の変種として認めることは難しいと批判されることがあるが、英語の変種の中にも他の英語話者にとって理解しづらいと考えられている英語があることから、理解しやすさをピジン英語と他の英語の変種との違いの基準とすることはできないであろう (Kirkpatrick, 2007)。

社会言語学的視点に基づくならば、イギリス英語もアメリカ英語もシンガポール英語も英語の変種 (variety) である。英語の変種を説明する用語として、native variety of English と nativised variety of English がある (前掲, 2007)。この二つの分け方は、Kachru の World Englishes の内円と外円という分け方に対応している。Native variety of English は、イギリス英語やアメリカ英語のように英語の native speaker と呼ばれる人々によって使われている英語を意味しており、Kachru の内円に属する英語を意味している。一方、nativised variety of English は、当初英語は話されていなかったがその地域の言語 (local languages) や文化の影響を受けて発展してきた新しい変種としての英語を意味しており (前掲, 2007)、Kachru の外円に属する英語を指す。社会言語学的視点に基づくならば、native variety of English (イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語、カナダ英語など英語を第一言語として使用する国々の英語) と nativised variety of English (シンガポール英語、マレーシア英語、インド英語など英語を公用語または第二言語として使用する国々の英語) は、その言葉が話されている地域の言語と文化の影響を受けて発展してきたという経緯から両方とも変



種とみなしていいと考えることができる (Kirkpatrick, 2007)。同じ変種の英語を native variety of English と nativised variety of English に分ける根拠は何か。一つは、native variety of English に属する英語の方が nativised variety of English よりも英語が使われてきた長い歴史があるということであるが、そうなるとアメリカ英語は、イギリス英語と比較するとその英語の歴史は短いので、nativised variety of English となるが、そのようなカテゴリー化はほとんどの人に受け入れられないので、これは分類の基準にはならない (前掲, 2007)。また nativised variety of English というカテゴリーは、native variety of English よりも劣っているという印象が持たれる傾向にあることも考えられるが、言葉に優劣をつけるべきではないから (前掲, 2007)、これも根拠とはならないだろう。上記のようにこの二つのカテゴリーで分類するのではなく、様々な英語はそれぞれの英語を発達させてきた人々の文化と言語によって影響を受けているという共通点に基づけば、どの英語も標準か非標準、または優劣の区別のない変種であると考えべきである (前掲, 2007)。

イギリス英語を例にとり、その成り立ちの歴史を振り返ってみると、変種とみなされる理由が明らかになる。またそこには方言の存在もあり、今話題となっている World Englishes の概念がいかに様々な種類の英語を内包しているか理解できるであろう。イギリス英語の原型は5世紀半ばにブリテン島 (今のイギリス) に侵攻してきたゲルマン人の話していた言葉 (古英語) だといわれている (稲木・堀田・沖田, 2007)。そういうわけで、英語は、ブリテン島 (今のイギリス) の土着の言語ではなく、ジュート族、サクソン族といったゲルマン民族がヨーロッパ大陸から侵攻し持ち込んだ言語である。先住民はイベリア人だといわれているが、ゲルマン人の侵攻前には歴史上分かっている限りにおいて言語上英語に影響を及ぼした言語とその言語の話者は、大陸からやってきたケルト語の話者ケルト人である。その後ブリテン島は、紀元前55から54年ごろローマ帝国による侵攻を経験し、ラテン語の影響も受けた。そしてローマ帝国は崩壊し、ゲルマン人がブリテン島にゲルマン七王国を作った7世紀初めには既にケルト人は、今のウェールズやスコットランドに追いやられたが、ケルト語は山や川などの名前に残ることになる。597年からブリテン島のアングロサクソン人へのキリスト教の布教が始まり、教会、学校、病院関係の語彙がラテン語から借入された (八木・吉田・梅咲, 1997)。また、8世紀に始まったヴァイキング活動により古ノルド語から普段日常生活に関係する語彙が借入された。借入された語彙の例として、call、die、get、guess、hit、want や they、their、them、till、through などの機能語などがある (前掲, 1997)。ゲルマン民族の支配が続くうち、1066年に北フランスのノルマンディー公ウイリアム王の侵攻により、イギリスはその後約300年間フランス語が主要言語となる時代を迎える。この時代英語がまったく使われていなかったわけではないが、公的言語として使われていなかったこと、文学作品も英語で書かれることが少なかった理由から、英語がその語彙、文法構造という点で言語としての発達をしなかったといわれている。この時期に大量のフランス語がブリテン島で話されていた英語へ借入された。フランスの上流階級の影響で、ドレスに関する語として gown、buckle、button、coat、robe、veil、apparel、fur が英語に入り、食事に関する語でも appetite、taste、feast、dinner、supper といった語が

当時の英語話者の間で使われるようになった (Bambas, 1991)。当時のフランスの人々の文化が言語とともに入ってきたのである。また、大勢の外国人がブリテン島に移住したこと、フランス語からの借入の影響によりそれまでの複雑な文法規則を持っていた古英語が単純化し、今の英語に近くなってきた。さらに14世紀になると英語がイギリスの第一言語として復活し、フランス語が第一言語であった約300年間の間英語が言語として発達しなかったという経緯があったため、不足している英語表現をラテン語から借入したので、大量のラテン語特有の多音節語で日常的には使用されない学術的な表現が英語に導入された(前掲, 1991)。1500年代にはイギリスは大航海時代を迎え、世界に多くの植民地を拡大していくことになり、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドなどのアジアへと進出していくのであった。この時期にはヨーロッパの言語からだけでなく植民地から多くの語彙を借入することになった。このようにイギリスにおける英語発達史を鳥瞰するだけで、英語が長い歴史の中で様々な外国語と出会い、またゲルマン人が定住する前から使われていたケルト語やラテン語からの借入があり語彙数が増えていったことが分かる。また英語の構造という点でも、外国人との接触を通して複雑な文法構造が特徴的である古英語から中期英語期を経て現在の英語へと変化していったことを勘案しても、英語は他の言語や文化によって影響を受けて発達してきた言語であることは明らかである。その歴史が長いという点で、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語とは異なるが、英語が伝わる前に既にその土地では話されていた言語が存在したという点、そして英語が現地の他の言語（土着の言語）や文化に影響を受け続け独自の変化を遂げていることから、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語など内円に属している英語は、外円に属する英語とともに英語の変種であるといえる (Kirkpatrick, 2007)。<sup>5</sup>つまり、native variety と分類されるイギリス英語、アメリカ英語もマレーシア英語やシンガポール英語などの nativised variety と同様に変容と変化によって特徴づけられるため、純粋な英語は存在しないと考えられるであろう。

またイギリス英語は、地域によって方言 (dialect) があり、さらにイギリスの場合は、Received Pronunciation (RP) (容認英語) と呼ばれる発音 (accent) で英語を話す人かどうかで、その人の階級が分かるといわれている (稲木・堀田・沖田, 2007)。RP は事実上のイギリスの標準語であり、この容認英語を話す人々は、ロンドンで大学教育を受けた上流階級の人々が話す英語だと定義されていて、BBC 放送局で話されている英語も RP である。またイギリス首相になるような人が労働者階級であった場合は、RP の発音になるよう矯正訓練を受けなければ社会で受け入れられないといわれている。一方、下町のロンドンっ子が話すコックニーやリバプール方言など特徴のあるイギリス英語が存在するが、話者の数としてはかなり少ない RP 英語は近年ではコックニー英語の影響を受け、その発音も変化しつつある。このコックニー英語と RP の特徴を持つ英語は、ロンドン以東のテムズ河の河口地域から広まったため河口域 (Estuary) 英語と呼ばれている (東京外語大学モジュール, October 5, 2019)。他にもスコットランド方言や北部方言、南東部方言、南西部方言などがある。言語は、異文化の人との接触により、混ざり合いながら社会の変化とともに発展してい

く文化の産物である。このようにイギリス英語と一般的にいても様々な種類が存在している。どの英語を「イギリス英語」と呼ぶべきか、イギリス英語が学習目標とする英語だと考えている英語学習者は、果たしてどんなイギリス英語を念頭に置いているのだろうか、難しい問題である。

アメリカ英語もまた影響力のある英語の変種である。その理由は、アメリカという国が世界で経済的、軍事的にも強い国であり、またコンピューター産業の発達とコミュニケーション技術の発達によりアメリカ英語が全世界に発信される機会を得たからだと考えられる。その国力のため、20世紀になってアメリカ英語は標準英語とみなされるようになったが、アメリカ英語もその歴史を振り返ってみるとイギリス英語と同様に、英語が大陸に伝わる前、また伝わってから他の言語の影響を受け多くの語彙を借入しながら発展してきた英語だと考えられる。

最も有名な英語話者のアメリカ移民は、1620年にメイフラワー号に乗ってプリマス（マサチューセッツ州）にやってきた英国人清教徒である。彼らの入植以前の1607年には、既にヴァージニアに永久的植民地が建設されていた。ヴァージニアの入植者たちの英語は、イングランド西部の出身者で、母音の後のrの音を強く発音する特徴を持った英語であったが、プリマスの入植者はイングランド東部の出身者で、彼らが話す英語は母音の後のr音を省く特徴をもっており、今のニューイングランド地方の人々の発音の特徴として受け継がれている（稲木・堀田・沖田、2007）。アメリカ英語の特徴はこの頃から生まれていたのである。

イギリスからの入植者がアメリカ大陸にやってくる前には、既に多くの部族から成る先住民族がいた。いわゆる native American である。先住民族は、イギリスからの移住者によって征服されるようになり、彼らの言葉の数は次第に減少していったのだが、ブリティッシュ島のケルト人の場合と同じように地名などには彼らの言葉が今でもアメリカ英語に残っている。例えば、Indiana は「インディアンの土地」を意味しており、ピューリタンが入植したプリマスのある州の Massachusetts は、インディアンの部族の名前から命名され、もとは「大きな丘のある場所」という意味である（英語雑貨屋、2010）。1776年のイギリスからの政治的独立当初、13州で話されていた英語は当時のイギリス英語と似ていたが、独立後アメリカには新世界を求めて他のヨーロッパの国々やアジアからの移民の数が増え、ゴールドラッシュで西部開拓が進むなど人々が移動するようになると、英語も多様性を帯びるようになっていった。

このような歴史の流れの中で、また、アフリカ系アメリカ人が話す英語が発展して生まれてきた黒人英語もアメリカ英語の中の変種の一つである。黒人英語は、英語で Black English を指すのだが、“Black” という言葉には差別的な含意があるということで今では African American Vernacular English (AAVE) と呼ばれるようになっていく（堀田、2017）。Vernacular English とは日常英語という意味で、アフリカ系アメリカ人の日常英語を指す。AAVE の起源については、クレオール仮説（creolist hypothesis）と英語仮説（Anglicist hypothesis）がある。英語クレオール仮説は、AAVE の起源を英語と西アフリカの諸言語とが混りあい母語化したクレオール語から言語変化したものであると考えられ、英語仮説は、元はイギリス諸島から伝わった英語の変種で、年月が経つ過程で独

自の言語変化の末にできた言語であると考えられている（堀田、2017）。

さらに、政治的独立を達成した後、言語的にも独立をすべく、ノア・ウェブスター（ウェブスターの辞書で有名な人物）が中心となってアメリカ英語を確立していった。ウェブスターの辞書ではアメリカ式綴りが紹介された。例えば、colour は color、travelling は traveling、programme は program、organise は organize というように綴りが変化した。さらにこのような言語的独立だけでなく、その後長年の様々な地域からの移民によって形成されてきた文化の中から、イギリス英語とは異なる独特のアメリカ英語が誕生している。例えばアメリカ英語では“toilet”は便器を意味するが、「お手洗いはどこですか」と尋ねる場合は、“bathroom”か“restroom”という単語を使う。イギリス英語では、“toilet”はトイレという空間自体を意味するので、アメリカ流に“bathroom”と表現してしまうと、「ここにはシャワーはない」となる（TABIPPO.net、September 4, 2019）。

イギリス英語と同じようにアメリカ英語にも、その地域によって方言があり、またグローバル化の影響で移民が増えてくると、移民の出身地ごとに訛りも様々である。おおよその区分としては、北部方言、中部方言、南部方言であるが、細かく分けると他にもカリフォルニアで話されている西海岸方言や東海岸方言もあるといわれている。北部方言はボストンを中心としたニューイングランドを含み、発音の点ではイギリス南部の英語に近い（稲木・堀田・沖田、2007）。フィラデルフィア・アパラチア地方から西部にかけて地域（その中にイリノイ州、インディアナ州、アイオワ州、オハイオ州、ミシガン州、ミズーリ州、カンザス州、ミネソタ州、サウスダコタ州、ノースダコタ州、ネブラス州を含む）で話されている英語を中部方言といい、この地域で話されている英語が General American（アメリカ標準英語）の源流となっているといわれている（八木・吉田・梅咲、1996；フラミンゴ英会話ブログ、September 2, 2019）。アメリカ英語方言で有名なものが「あなた達」を意味する表現で、北部と西海岸方言では“you guys”、南東部では“y’all”、他の地域では“you all”となり、またアメリカ人がよく飲んでいる炭酸も、西海岸と東海岸では“soda”であり、中部では“pop”、南部では“coke”と言う。<sup>6</sup>アメリカは広大な土地を持つ国である。そこに様々な文化背景を持つ移民が移住するようになり、年月が経つにつれてそれぞれの地域で独自の方言や訛りが生まれてきた。その様相は、単に「アメリカ英語」と一括りにできないほど多様なのである。言葉は時代が移り変わるとともに変化していく。英語の発達の歴史を辿ってみても、イギリス英語やイギリス英語から派生したアメリカ英語がいかに異なる道をたどって変化してきたか分かる。

### 3. “Native speaker” と “Nonnative speaker” の概念

今から約 30 年前筆者が大学生の頃、英語の native speaker の先生と言えばイギリス人かアメリカ人だろう思っていたものである。当時、英会話学校の先生がニュージーランド人だったので、英語を学ぶつもりだったから幾分違和感があったという話も聞いたことがある。しかし今から 15 年ほど前にこんなことがあった。筆者が大学院時代の指導教授の退任記念講演と同窓会を兼ねた集ま

りに参加するために平成15年に母校インディアナ大学ブルーミントン校を尋ねたとき、大学附属の語学研修所の英語の Assistant Teacher として日本人大学院生が英語を教えていることを知り、とても驚いた。英語を流暢に話すことができ、授業を英語で教えることができるならば英語を母語としない人でも英語講師として外国人留学生に英語を教えることはできるのであり、英語教師=アメリカ人という考えは偏見だというのである。英語を学ぼうとアメリカに語学留学したところ日本人の英語講師に英語を習うことになったということが起こり得るわけで、これはまさしく World Englishes の考え方の影響だと思ったが、アメリカに英語を学びに来ている日本の学習者はこの考え方を理解できるだろうかと不安にも思った。Kachru の拡大円に属する、英語を外国語として学ぶ日本人の英語は、Kirkpatrick (2007) による nativized variety の話者でもない、いわゆる “nonnative speaker” である。内円にも外円にも属さない、英語を外国語として使う話者の日本人が、アメリカの大学の語学研修所で英語の講師をする時代が到来している。内円、外円、拡大円に属する英語、また native vs. nonnative という概念について再考する必要があるようだ。

公用語という視点から World Englishes について考察してみる。イギリスはスコットランド、ウェールズ、北アイルランド、イングランドの連合国であり、公用語に関しても、イングランドの公用語は英語の他に、スコットランドではスコットランド語、ウェールズでウェールズ語、北アイルランドではアイルランド語がそれぞれ公用語としてみとめられている。アメリカ合衆国でも国家レベルで公用語が英語と決まっているわけではなく、英語は事実上の公用語 (de facto language) である。州ごとに英語を公用語としている州もあれば、ルイジアナ州のようにフランス語を公用語にしている州もある。カナダでは、憲法で英語とフランス語が公用語として認められている。Nativised variety of English に分類されるシンガポール英語も、国内では他に中国語(北京語)、マレー語、タミール語が公用語として認められている。インドでは、ヒンディー語が連邦公用語であり、英語は公用語扱いであるが正確には準公用語となっており、その他に多くの指定言語がある (Spiceup, 2014)。<sup>7</sup> 内円に属するイギリスやアメリカも、外円に属するシンガポールやインドなどの英語を公用語として使用する国々も、英語以外の言語が英語と共存している多言語国家なのである。このようにそれぞれの国の言語事情を鳥瞰してみると、World Englishes 時代においてはもはや native speaker of English と nonnative speaker of English の定義が難しくなってくる。言語学的には、母語とは選択の余地のない生まれたときから使っている唯一の言葉のことを意味する (田中、1999) ことから、native speaker of English は、生まれたときから英語を母語とする話者のことを指す。しかし、どこの国においても移民の子供の多くは生まれたときから使っている母語があっても、学校に行くようになると次第に母語よりよく使うようになる英語やほかの主要語の能力が高まる。また、Green card を取得し、<sup>8</sup> 実用レベルで英語を使って日常生活を営み、学校や職場で機能していける英語力を持つ話者は、アメリカ国籍を持っていなければ nonnative speaker of English と呼ばれるべきなのかという疑問がわいてくる。またアメリカ人やイギリス人が native speaker だと定義することや、一般的に native speaker よりも nonnative speaker の方がその英語運用能力と



いう点で劣ると断定するのも極めて難しい。近年益々人の交流が盛んになり、英語を使って仕事をする人の数が増えている状況で（図1と図2を参照）、英語を母語とする native speaker と同等の英語運用能力のある人は多く存在する。さらにシンガポール人のように、英語の他に三つの公用語があるが、学校教育の言語を英語と定めていることで、英語によるコミュニケーション能力が十分備わっている場合もある。このような理由から、World Englishes 時代には、native speaker of English は英語を母語としている人という定義は通用しなくなってきている（Kirkpatrick, 2007）。

#### 4. 日本の英語学習と World Englishes

「グローバル時代に生きる日本人として必要なコミュニケーション能力の育成（平成20－21年に学習指導要領が改定されたとき）」という目標を掲げて既に10年経ち、また平成25年には文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、それまで日本の小学校で行われていた外国語活動の教科化が提案され、令和2年（2020年）から小学校5年生及び6年生の英語の授業は教科となる。World Englishes 時代がやってきたといわれている昨今、この World Englishes の考え方や様々な特徴を持つ英語たちの存在を認めざるを得ないという状況は日本の英語学習者にどのような示唆を与えているだろうか。World Englishes 時代に、日本の英語教育界が掲げている「グローバル人材に必要な英語能力」はいかにして育成されるべきか考えてみたい。

戦後の日本では（1947年）、政治、経済面だけでなく教育面についても米国の影響を大いに受け、六三三四制の新しい学校制度が発足し、初めて小学校、中学校、高等学校について学習指導要領（The Course of Study）が作成された。今の学習指導要領よりは簡易なものであったが、以来何回か改定されて現在に至っている（高梨・高橋、2011）。日本の公立中学校及び公立高等学校で使われている検定教科書はこの学習指導要領に基づいて書かれているため、英語の授業で使われている検定教科書の内容に注目してみると、日本の英語教育が学習者に何を教授してきたのか分かる。例えば戦後の教科書では、アメリカの中産階級家庭生活や学校生活が中心に題材となっていて、日本の英語学習者はアメリカでの典型的な生活の様子について英語を通して学んでいた（鈴木、2014）。<sup>9</sup> 1957年から1976年ごろの高度経済成長期時代になると、主人公がインドやアフリカに旅をするといった欧米文化中心から世界の他の地域へと関心を移していくのであった。また、“Have you ~?” が “Do you have ~?” といったアメリカ式になったのもこの頃である。また、日本を題材にした内容のものができて、1970年代から1990年代にかけてより積極的に日本文化を発信する意義を示す題材が増えてくる。同時にアジア、アフリカ、中南米を題材にした内容も増え、地球環境について考えさせる題材が扱われるようになる。1990年代後半から現在に至る間では、欧米だけでなくグローバルな視点を養うことの重要性が強調され、アイヌ文化を始めとする少数民族の文化や言語、世界における日本人の役割をテーマにした内容が増えてくる。何年か前までは「国際理解」という文言が学習指導要領にあり、近年益々英語の世界共通語としての役割が重要になってきて、英語の



教科書の内容も日本人としてのアイデンティティの重要性を強調しながら、世界に目を向け英語で発信していくように日本の学習者を導く傾向にある。英語が教科化する2020年までの移行期間の2018年と2019年に小学校3、4年生の外国語活動で使われている教材 *Let's Try!* は児童の身の回りに存在する物や家族、学校の先生と友達といった身近にいる人々とのやり取りが英語でできることを目指しているが、5、6年生で使う教材の *We Can!* では、世界の様々な文化とそこに生きる人々の存在を意識させ、目の前にいる相手だけでなく世界のあらゆる人々との英語によるコミュニケーションを目指す内容になっている。このように英語の教科書の内容の変遷を俯瞰してみると、グローバル人材育成を目指すようになってから世界が直面している環境問題や多文化の存在、異文化間の違いについて気づかせる話題を扱った内容になってきていることが分かる。しかし、英語教育を通して、世界には様々な英語が存在していてそれぞれアイデンティティを持ち、もはやイギリス英語やアメリカ英語が標準英語だという時代ではないのだという World Englishes の話題とは結び付いていないようである。学習指導要領でも、英語学習の重要性を日本の英語学習者に説得するために英語が世界共通語になってきたことを教えているが、世界共通語となった英語はどんな英語なのか、様々な英語が存在する World Englishes 時代にどんな英語で発信していくべきかについて英語学習を通して考えさせる必要があるのではないだろうか。

World Englishes 時代の到来は、日本の英語教育に携わる人々に、英語学習を通して英語の多様性、特に文化の多様性を認めることのできる人材育成の重要性を示唆している。以下は、平成26年に文部科学省から出された「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」の「1 英語教育改革の背景」の中の文言である。<sup>10</sup>

「我が国では、人々が英語をはじめとする外国語を日常的に使用する機会は限られている。しかしながら、東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020(平成32)年はもとより、現在、学校で学ぶ児童生徒が卒業後に社会で活躍するであろう2050(平成62)年頃には、我が国は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。」

ここでは、文部科学省の英語教育改革の目的の中に多文化・多言語・多民族の人達との交流が増えるとともに日本国民の外国語を用いたコミュニケーション能力が必要だと述べられている。しかしここで、英語能力が国際理解能力の養成に必須であると考えれば、英語の多様性についての理解も必須である。そのためにカリキュラムにも文化の違いから生じる英語の変種についての理解と World Englishes 時代における英語コミュニケーションについて日本の学習者に考えさせること、また教科書で扱う題材にも英語の変種を扱った内容に関するテキストを入れていく必要がある。

World Englishes 時代に異文化間コミュニケーションを成功させるための方法としての *lingua franca approach* を推奨する立場から、Jenkins (2002, 2015) は、音声面から理解可能な共通語としてのコアとなるアクセント (the mutual intelligibility of the speakers' accents) を特定する研究を

している。共通語としての英語のアクセントとしてこの音だけを習得していれば英語話者として通じるといふわけである。Jenkins の考え方は、native speakers of English をモデルとしておらず、英語を母語又は第一言語としない話者の中で英語によるコミュニケーションを行うときに理解可能であるかどうかが基準となっている。この Jenkins の研究はまだ継続中であり、今後もどのように研究が進化していくのか興味深い。

上記以外に日本の英語学習者が World Englishes 時代に目指す英語コミュニケーション能力習得のために少なくとも語彙と文型について次の視点に基づいた英語学習を行うべきであろう。

語彙に関しては、言葉の学習を通して、文化理解が可能になるため、なるべく社会文化的視点から興味を持って語彙を理解する。世界の英語たちの中で使われている語彙は多様性に富んでいる。例えば、アメリカ英語では「牢屋」を“jail”と書くが、イギリス英語では発音 (/dʒeɪl/) は同じだが綴りは“gaol”となるなど、英語の変種によって、単語の発音、綴りや意味が異なっている場合もある。それぞれの変種で使われている語彙や表現を学ぶことはその変種の話者の文化を理解することであるから、そのような視点から語彙を増やしていく必要がある。

また、時代とともに新しい言葉が誕生している。社会の変化に伴い、言葉も変化しつつある。“Ethnicity”という単語は、「民族性」という意味であるが、1972年にOxford English Dictionaryの補足版に初めて語彙として入った。1960年代からアメリカでのウーマンリブ運動、黒人指導者による公民権運動など民族問題が人々の意識の中で高まり、生まれた言葉であろう。

日本語の「かわいい」を意味する /kəwʌi/ というように /ʌ/ にアクセントを置いて発音する“kawaii”も、いつのまにかOxford Dictionaryに名詞と形容詞の形で記載されており、“The quality of being cute, or items that are cute”と説明されている(Collins English Dictionary, December 12, 2019)。まさしく日本語の「かわいい」の意味である。これは日本のポップカルチャーが海外で話題になったことがきっかけであるといわれている。そのほかにも「カラオケ」を意味する“Karaoke”(/kærəʊki/と発音する)は、カラオケがアメリカでも流行ったことから辞書に載るようになった(Collins English Dictionary, December 12, 2019)。「レンズがぼける」の意味のbokeh (/bəʊkɛi/と発音する)もOxford Dictionaryに“the visual quality of the out-of-focus areas of a photographic image, especially as rendered by a particular lens.”と定義されている(Merriam-Webster, December 12, 2019)。生まれる語があれば、これまで使っていた言葉が廃れていくこともある。さらに、良い意味の言葉が悪い意味のことばになり(pejoration)、悪い意味の言葉が良い意味の言葉になる(amelioration)など、言葉は常に変化している。学習者は常にその変化についていかなければならない。

英語で映画を見ているときに気になった単語があった場合、辞書でその綴りを探してみるのも効果的な学習法である。英語は綴りと音が必ずしも一致していない点難しい言語である。音を聞いて綴りを何通りか組み合わせてみると英語の綴りと音の関係が次第に理解できるようになり、その結果見つけた言葉の綴りは記憶に残りやすい。「知りたい」と思いながら探した結果分かった単語は

記憶に残りやすいのである。

文型に関しても、英語の文構造の変化に敏感になるために英字新聞を読む習慣や映画を見るようにして、常に英語の変化に注目していく。英語の文法も時代とともに変化している。言葉の使い方、英語の文法構造の変化をいち早く表現として取り入れ、その時代の言語表現を含む文化を表しているのが新聞や映画だからである。例えば、以前は “It helps me to understand.” と表現されていたが、既に “It helps me understand.” と表現されるようになっていく。また強調を表す “do” も “very much” の意味で動詞とともによく使われるようになっていく。例えば、“Do you really want to go to the movie with me?” に対し、「もちろん行とも」といった強調の意味を表すために “I do go.” と返事をする。本来動詞を2つ続けていくことができないが、“very much” の意味でよく使われる。英字新聞や映画では、現在使われている新しい表現に出会うこともある。“Let’s go to see the movie.” も “Let’s go see the movie.” というように “to” が省かれる傾向がある。英語はどんどん変化しているので、常に興味を持って英語学習をしていく必要がある。

2019年9月に Merriam-Webster Dictionary は、中性代名詞 (gender-neutral pronouns) として they と themselves を辞書に加えると発表した (Merriam-Webster, December 12, 2019)。かねてからの男性だか女性だか分からない名詞をどちらの代名詞で指すのかという議論に終止符を打つことになったのである。これまで単数名詞が男性か女性か分からない場合、あるいはどちらでも指す場合、代名詞に “he” を使うか “she” を使うか、または “he or she” を使うか議論になってきたが、この議論の末到達した結論ということである。例で示すと以下のようなになる。“If a patient does not receive the correct treatment, their illness may get worse, and they might also become unconscious during surgery.” のように “their” や “they” で示すということである (下線部は筆者による)。また、動詞は they に合わせる。

インターネットの発達とともに私たちは、新しい情報がすぐ入手できるようになり、また交通機関の発達とともに人々が遠距離でも早く移動することが可能となり、コミュニケーションの範囲も広がる。異文化の人々の交流が盛んになれば、当然新しい語彙も誕生し、これまでの語彙の意味も変化していく。グローバル社会に生きるためには、幅広い視野でものを考える能力が必要なのだが、そのために新しい情報に関心を持ち、言葉の変化に敏感になっていくことが大切なのである。このような理由から、日本の英語学習者は、英語の多様性についての理解を深め、その変化に敏感になりながら英語を学習していかなければならない。

## 5. World Englishes 時代を生き抜く—結論—

19世紀に標準英語とみなされたイギリス英語も20世紀に標準英語とみなされたアメリカ英語も、その歴史を振り返ってみると決して純粋な英語とは言えず、長い歴史の中で異文化との接触を経験しながら、外国語から語彙を借入し、外国語の文法を手本として規範文法を作成するなど、他の言

語と混じり合いながら発展してきたことは明らかである。またかつて1066年のノルマンディー公ウイリアムがブリテン島の王位に就いたとき多くのフランス語が借入され、フランス文化も取り入れられたように、語彙を借入するということは、文化も輸入することになる。そして、文化言語学によるならば、言葉の意味はそれぞれの社会で生活する話者によって新しく概念化され、発展するので、英語の変種の場合もそれぞれの地域で綴りが同じ英単語でも、その概念までもが同じであるとは限らない。さらに、シンガポール英語（シングリッシュ）やピジン英語、クレオール英語のように、人々が交流することで現地の言葉と英語が混じり合い、人々にとって合理的で便利な語彙や文法体系を持つ新しい言語が誕生することもある。英語の変種はそれぞれ独特の文化背景の中で変化しながら形成されているので、それぞれが極めて個性的な存在である。

このような World Englishes 時代に生きる日本の英語学習者は、学習している英語という言語について新しい発想で向き合う必要がある。文部科学省の英語指導要領には、日本の学習者は英語コミュニケーション能力を磨くことで、グローバルな視点を養うことができ、国際理解能力を養成できると謳っているが、英語コミュニケーション能力の養成の目的はそれだけではない。World Englishes 時代の学習者は、英語運用能力を高める過程で、英語の多様性と変化に気づき、様々な文化の在りようや人々の思想について学ぶことで、複文化的思考が養成され、やがて国際理解能力が養われるのである。言い換えれば、日本の学習者が学ぼうとしている英語は、多様性を帯びており、その多様性の背後には多様な文化がある。英語を使うことで世界中の人々との円滑な意思疎通が可能になるためには、英語の多様性を理解し、英語コミュニケーションを通して相互理解できるように異文化に対して柔軟（flexibility）で適切な対応ができる能力（adaptability）を養成することが肝要である。

新しい英語指導要領では、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: ヨーロッパ言語共通参照枠）を英語学習者の英語力の評価基準にしている。しかし、CEFRは、もともと英語能力だけを評価する指標ではなく、言語能力の評価基準でもない。ヨーロッパでは、それぞれの国の人々が母語以外に少なくとも2つ以上の外国語を学習することで、EU地域内で相互理解と相互交流の促進を助けられると考えられている。この考え方は複言語主義・複文化主義（plurilingualism・pluriculturalism）といわれている。色々な言語話者と多様な文化を持つ国々から成るヨーロッパ大陸で、その構成員一人一人がなるべく多くの外国語を学び、必要に応じて使えるようになることが大切だと考えられ、外国語学習者がどの程度コミュニケーションできるようになったかを確かめるための学習到達度の指標がCEFRである。それぞれの外国語習得の度合いは、その言語を使う度合いにより異なるとしても、なるべく多くの外国語を学習することで、それだけ多様な文化理解が可能になり、複眼的にものを捉えることができるといった人材を増やすことで、国際交流が盛んになり平和な社会実現が可能となるという発想である。CEFRの背景にある、母語以外にいくつかの外国語でコミュニケーションできる複言語・複文化主義的発想を持った人材を育成しようというヨーロッパ協議会の発想から学ぶことは多い。World Englishes 時代の日本の英語

学習は、世界共通語としての英語運用能力の獲得という発想にとどまらず、英語学習を通して英語の多様性を理解し複文化的視点を兼ね備えたグローバル人材の育成を目指していいのではないだろうか。

### 注

- <sup>1</sup> 本文1頁から3頁の図1と図2を含む英語を実用レベルで使っている人口についてのデータは、小柳恒一(2019)「世界の英語人口15億 | 日本も急増中! 英語を習得すべき8つの理由」(The English Club)を参照している。
- <sup>2</sup> 「奇跡体験アンビリバボー」という番組は2019年2月14日放送された。本文3頁から4頁のこのエピソードの詳細については、「70年の時を経て明かされる初恋ミステリー」(閲覧日、September 28, 2019)を参照している。
- <sup>3</sup> シンガポール英語の特徴については田嶋(2017)による「シングリッシュ(シンガポール英語)って? 歴史と特徴」を参照している。
- <sup>4</sup> この図は、Kachru(1992)を参考にして筆者が作成したものである。
- <sup>5</sup> 例を挙げると、イギリス英語より若い英語であるオーストラリア英語で有名なKangaroo, koala, boomerangという単語は全てオーストラリアの先住民アボリジニの言葉から借入されたものである。
- <sup>6</sup> アメリカ英語の方言の例については、Myスキ英語(2018)を参照した。
- <sup>7</sup> ヒンディー語から日本語に入ってきた単語に、バンガロー、シャンプー、ジャングル、カレーがある。人の交流に伴い、言葉も借入され、言葉は日々変化していくことがこのことから分かる(Spiceup, 2014)。
- <sup>8</sup> Green cardとは、アメリカ政府が発行する移民ビザ(アメリカ永住権)の通称である。
- <sup>9</sup> 本稿14頁から15頁に書かれている日本の英語検定教科書の内容の変遷については、鈴木(2014)を参照している。
- <sup>10</sup> 平成26年10月に文部科学省から出された「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」の「1 英語教育改革の背景」の中の「グローバル化の進展の中での英語力の重要性」の二番目のポイントと書かれている文言の引用である。

### 参考文献

- Bambas, R.C. (1991). *The Origin and History of the English Language* by Suzuki, E, and Sato, S (eds.). Tokyo: Kinseido.
- Definition of bokeh, Merriam-Webster Retrieved December 12, 2019 from <https://www.merriam-webster.com>
- Definition of karaoke. Retrieved December 12, 2019 from <https://www.collinsdictionary.com>
- Definition of Kawaii. Retrieved December 12, 2019 from <https://www.collinsdictionary.com>
- Jenkins, J. (2002). A sociolinguistically based, empirically researched pronunciation syllabus for English as an international language. *Applied Linguistics*, 23(1), 83-103.
- (2015). *Global Englishes A resource Book for Students* (3<sup>rd</sup> ed.) New York: Routledge English Language Introductions.
- Kachru, B. B. (1992). *The other tongue: English across cultures*. Urbana-Champaign: University of Illinois Press.
- Kirkpatrick, A. (2007). *World Englishes Implications for international communication and English Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sharifian, F. (2005). Cultural Conceptualisations in English words: A study of Aboriginal children in Perth. *Language and Education*, 19(1), 74-88.
- Sharifian, F. (2015). Cultural Linguistics and world Englishes. *World Englishes*, 34(4), 515-532.



Singular 'They.' Retrieved December 12, 2019 from <https://www.merriam-webster.com/words-at-play/singular-norbinary-they>

稲木昭子・堀田知子・沖田知子. (2007). 『新 えいごエイゴ英語学』東京：松柏社.

英語雑貨屋. (2010). 合衆国名の起源 (State Name Origin). Retrieved October 23, 2019 from <https://www.rondely.com/zakkaya/irir/sta2.htm>

小柳恒一. (2019). 「世界の英語人口 15 億 | 日本も急増中! 英語を習得すべき 8 つの理由」 (The English Club). Retrieved September 4, 2019 from <https://english-club.jp/blog/english-world-population/>

「奇跡体験アンビリバボー」2019年2月14日にフジテレビ「70年の時を経てあかされる初恋ミステリー」 Retrieved September 28, 2019 from [https://www.fujitv.co.jp/unb/contents/190214\\_4.html](https://www.fujitv.co.jp/unb/contents/190214_4.html)

小林泰秀. (1980). 「黒人の英語と言語の自然性」広島女学院大学論集、30巻、193-214.

Retrieved September 4, 2019 from <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/metadata/5289>

鈴木渉. (2014). 『英語教科書小史』

Retrieved August 31, 2019 from [Library.miyakyo-u.ac.jp/banner/exhibition/ex\\_textbook/H26kikakuten/image/shoshi.pdf](http://Library.miyakyo-u.ac.jp/banner/exhibition/ex_textbook/H26kikakuten/image/shoshi.pdf).

Spiceup. (2014). 「インドってヒンディー語の国じゃないの? ~ヒンディー語と英語の歴史~」

Retrieved October 28, 2019 from [https://india-it-school.com/india\\_hindi/](https://india-it-school.com/india_hindi/)

TABIPPO.net. 「英語にも方言や訛りがあった! 知っておくと便利な4ヶ国の特徴」

Retrieved September 4, 2019 from <https://tabippo.net/english-dialect-accent/>

高梨庸雄・高橋正夫. (2011). 『新・英語教育学概論』東京：金星堂.

竹林滋. アメリカ英語の母音 米国諸方言における母音音素体系 (5)

Retrieved September 2, 2019 from [repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/23305/1/acs015006.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/23305/1/acs015006.pdf)

田嶋麻里江. (2017). 「シングリッシュ (シンガポール英語) って? 歴史と特徴」 All About 旅行

Retrieved September 4, 2019 from <http://allabout.co.jp/>

田中克彦. (1999). 『クレオール語と日本語』東京：岩波書店.

田中美和子. (2005). 「音声学資料としての映画 - 『マイ・フェア・レディ』 (1964) に見るコックニー方言 -」 国際研究論叢、19(1)、39-53.

東京外国語大学モジュール. 「シンガポール英語」 「British English」 Retrieved October 5, 2019 from [www.coelang.tufs.ac.jp/mt/en-sg/dmod/](http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/en-sg/dmod/)

西山祐司. (1999). 「1 語用論の基礎概念」 『談話と文脈 岩波講座言語の科学 7』 田窪則行、西山祐司、三藤博、亀山恵、片桐恭弘 (pp.1-54). 東京：岩波書店.

フラミンゴ英会話ブログ 「【地域別!】英語の方言や訛りの種とその使用例とは?」

Retrieved September 2, 2019 from <https://app-flamingo.com/blog/180227-2/>

堀田隆一. (2017). 『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』 東京：研究社.

文部科学省. (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について報告~グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言~」 Retrieved September 4, 2019 from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)

My スキ英語. (2018). 「英語の方言・訛り | 発音と2種類以上の違いや特徴・例文や動画など」

Retrieved September 2, 2019 from <https://mysuki.jp/english-dialect-accent-21766>

八木克正・吉田和男・梅咲敦子. (1997). 『英語学概論 An Introduction to English Linguistics』東京：英宝社.

山下一夫. (2018). 『複言語のすすめ 中国語とトクピシン語』 慶応義塾大学外国語教育研究センター.

Retrieved September 2, 2019 from [www.flang.keio.ac.jp/plurilingualism/education001.html](http://www.flang.keio.ac.jp/plurilingualism/education001.html)



この論文は、2019年10月11日に成蹊大学で開催された「武蔵野地域五大学共同講演会」にて筆者が行った講演“World Englishes 時代を生き抜く：世界とつながる英語コミュニケーション”の内容を加筆修正したものであることをここにお断りします。